

---

転生したらチートアイテムが弱すぎて詰んでしまいました

bouton

---

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

## 注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生したらチートアイテムが弱すぎて詰んでしまいました

### 【作者名】

b o u t o n

### 【あらすじ】

異世界に転生したら無双し放題！しかし異世界はそんな甘くなかった。チートアイテムもなし。特別運動できるわけでもない。特別頭がいいわけでもない。詰んだかもしれない。

「起きて…起きてください」

俺はそう言われ目を覚ました。

アニメや漫画の影響で異世界転生に憧れていた俺は、ついに転生を果たすことができた。

しかも、きちんと異世界に転生できたようだ。

武器も自由に選べれみたいだな。

それならゲームでひたすら鍛えられた弓の技術を使って異世界を無双するぞ！

「グラルル：ララララ」

お前は俺の記念すべき初めての相手だ！

俺は早速相棒になった弓を構え、敵の頭を撃ち抜いた：はずだった。

しかし：全く効いていない！

むしろ敵の方が俺より強くないか？

くそっ。こいつ、反撃しようとしてやがる。

俺はこのまま異世界を攻略することができるのか？

毎週金曜日の9時に更新予定です。

面白いと思ったら、続きが見たいと思ったら反応をお願いします。

ハーメルン等の他サイトで二重投稿を行っています。

## 第一話

## 転生

「起きて…起きてください」

お、お決まりのセリフだ。

やはり俺の予想は間違っていなかったようだ。

「起きてくださいってば」

やっぱり俺が元いた世界ではないっぽいな。

俺は異世界に転生したようだ。

どうせこの声も、女神か何かだろう。

「ようやく起きましたね」

「えっと、ここは？」

「気づきましたか？ここはあなたが先程までいた世界ではありません  
せん」

「やっぱりな。死んで異世界に来たのか」

「驚かないのですか？あなた死んだんですよ？」

何もかも予想通りの会話だ。

「死んだもなにも、俺は自分の意思でここに来たんだ」

「自分で死んだ？一体なぜ？」

「精神的に何もかも追い込まれていたんだよ」

「ラノベの見すぎで懂れてたからつい調子に乗って死んでみたなんて馬鹿なこと、口が裂けても言えねーよ。」

「大変だったんですね」

「でも君がいれば俺は安心だけだな」

「まあ、だめです。恥ずかしいですわ」

「ふっ。この世界の女はちょろいみたいだぜ。」

「しかもこんな可愛いなんて、俺がきた世界は当たり前だったみたいだな。」

「そう言えば、何で俺はこの世界へ？」

「それは、この世界の邪悪な魔王を倒して欲しいからです。」

「そしてあなたは、その勇者に選ばれました。」

「やっぱりな。」

「絶対そうだと思ったわー。」

「まじで今まで怖いくらいに全部予想通りだぜ。」

どうせ今からチートアイテムをくれるんだろ。

まあ、一応、

「でもそんな相手にこんな俺が太刀打ちできるのかー？

流石に手ぶらじゃ無理だぜー？」

「もちろんそんなことはございません。

勇者様には、相棒の武器を選んでもらいます。

どうぞ、ここから好きな物を選んでください」

だが、俺には一切の迷いもなかった。

俺は弓を選ぶ。

なぜなら俺は前世ではFPSを腐るほどやってたおかげか誰よりもエームには自信があるからだ。

「じゃあ、俺はこの弓にします」

何の震えもない声で、俺は答えた。

「弓？が何かわかりませんが、このクロスボウで良いのですね？」

この世界では弓とは言わないらしい。

恐らく剣や斧も、ソードとかアローとかいうのだろう。

まあ、たいしたことではない。

「俺はこれで世界を救う。」

「では、行ってらっしゃいませ。  
困ったことがあったらまた来てくださいね。」

こうして俺の異世界生活が始まった。

お？ようやく敵キャラ発見だ。

いかにも弱そうだな。まずはチュートリアルか。

「グルルル：ララララ」

「お前は俺の記念すべき初めての相手だ！」

矢をいっぱいに弾いて相手の頭という頭に直撃させた。

やっぱり俺の腕は異世界でも鈍らないようだな。

「グルルル：ララララ、、ラー！」

ん？ダメージ全く効いてなくね？

## 第二話

## 再生

やばい…全然ダメージ入ってない。

この武器って何でも倒せる最強武器じゃないのか？

「グルル…ルルルガーグーガー！」

やばい襲ってくる！

これって俺が弱いだけで武器は実は強いみたいな展開だろ？  
違うなら出てこいよ！

めっちゃ強い味方が助けに来るとかはないのかよ？

「ボカーン！」

「ぐああああー」

頭がかち割られるような痛みだった。

これって、、、血？！

俺は初めて頭から血が出た。

「嘘…だろ…俺、また死ぬのか？」

意識が…だんだんと…無くなって…

「起きて…起きてください。」

ん？ここはさっきの？

「気がつきましたね。あなたは今、死んだんですよ。」

「そっか：俺、さっきモブキャラにやられて、」

「戻ってきてくれたんですね。何かお困ですか？」

「好きで戻ってきたわけじゃねーよ！」

「確かにあなた、あんな死に方をするなんて、弱いにも限度ってものがあります。」

見た目の割には結構きついこと言いやがる。

まあ、弱いのは事実なんだがな。

「ていうか、あの武器全然使い物にならないじゃねーかよ！  
最強の武器なんじゃねーのか？」

「あら？私がいつ最強と？」

確かに言われてみればそうだ。

相棒の武器を選べとは言っていたが、最強の武器を選べとは言っていないかった。

「でも、あんな感じで渡してくるんなら、何であんなに価値のないもの渡してくるんだ？」

「価値のないなんて失礼な。」

あれはこの世界では黄金より効果のあるものでできていて、最高の硬さと価値を持っているんですよ。」

意味ねー！

ふざけてるだろ。

剣や盾ならまだしも、弓が固くて何の意味があるんだよ。

ましてや高価なんて、売る前提の話かよ。

俺が思っていたイメージの武器と全然違うじゃねーか！

「一体どうすれば良かったんだよ！」

「冒険は、戦うことが全てではありません。時には戦いを避けるのも、真の戦いと言えるでしょう。」

お？

これはようやく異世界で迷った俺への大ヒントでは？

しかもこんなわかりやすいなんて、俺はやっぱりついてるかもな。

「じゃあ、今度こそ魔王を討伐してくるわ」

「行ってらっしゃいませ」

今度こそ旅は始まった・  
それもヒントありでな。

「グラルル：ララララ」

また同じ敵か。

今までの俺では立ち向かっていたが、今の俺の最適手段は、、

「逃げる！絶対逃げ切ってやる！」

猛スピードで駆け抜けた。

とにかく敵から少しでも離れたところに行くために。

途中、岩場や倒木で行けない場所は避けつつも、とにかく道を見つけて走った。

だがおかしい。

進める道がどこにもない。

走り進んでいたら、一つの大きな扉にぶつかった。

「いってー」

こんなモタモタしてたらすぐそこに敵が！

「グラルル：ララララ」

やばい、、またあの敵にやられる。

一体どうすれば・

俺は前世で得ていた異世界系アニメの知識をフル活用していたら、  
気づいてしまった。

あの敵を倒さないで、この扉が開かず先に進めないのでは？

冷静に考えてみると普通のことだが、俺はそれが本当だろうと、  
信じたくはなかった。

さっき、あの敵に殺されたばっかなのだ。

仕方のないことだろう。

だが、、、

「あの女神が言っていたことは関係ないのかよー！」

「グラルル：ララララ」

やべー余計挑発させちまった。

「ガララララー！！」

そっちが襲ってくるならこっちだって策がある。

「うおーーーーー！！」

そっちが襲ってくるならこっちだって策がある。

「うおー！ー！ー！ー！」

俺は身体中の力を手に集中させて、敵に立ち向かった。

「ばっっこー！ー！ーん！」

今度は俺がこいつの頭をかち割ってやったぜ。  
いい気味だ。

「ガララララルー！ー！ー！」

だがしかし、そんなに甘くはなかった。

見た目がモブっぽいからって、甘くみていたが、怯んただけで弱った様子は見せなかった。

「ばこっっ！」

やっぱり敵も俺のことを叩いて攻撃してきた。  
とんでもなく強い力だ。

さっきの仕返しなのか、死ぬ前に会った時よりも強い力みたいだ。  
もしかしたら、また戦いに負けるかもしれない。

このままじゃダメなのか？

だが、俺には叩く以外にここから抜け出す方法はないんだ。  
とにかく叩く！

「どりゃー！ー！ー！ー！」

視界がぼやけてきたが、体の振動から感じると、手の力は全く抜けていないようだ。

相手も同じく勝ちを譲らないようだ。

「ガールルルルー！」

敵はトドメを刺すように今までとは比べ物にならない強さで頭部を叩いてきた。

もう・・・だめかもしれない。

さっきみたいに死んで一からやり直すことになっていいのか？

異世界なんて楽しくなかったんだ。

俺が知ってる世界だともっと何もかも上手くいくはずじゃなかったのか？

なのになんで…

「帰らせてくれー！ー！ー！」

「……。」

おい！この状況だったら俺より強い人が助っ人に来てくれる展開じゃないのか？

「大丈夫か若いの？もう安心だ！」

とか言っ

て そんな上手く…行かないのか？

誰かが…俺のことを…救ってくれるんじゃない？…だって俺勇者だろ？

そうか。

俺は自分の力でこの世界を生きなければならないのか。

異世界っぽい技や武器に、頼り続けなくても、そもそも人間自体にできることはある。

俺はすぐに手を止め、足を使い、がこつと足を敵に当て、転ばした。

「ガルルルル」

何も怖く感じなかった。

そして、

「ぶっ叩いてやるー！」

俺は体の全身を目覚めさせて弓を振りかざした。

「ガーーーーーるーーーーるーーーーるううーーーーー」

「はあっ。はあっ、はー」

敵は倒れ込み、身動き一つしていないようだ。

ようやく俺は終わらしたようだ。

この世界で一番最初の壁。

チュートリアルってやつを。

「なんだ？なんか聞こえるぞ！」

「まだ、あなたの旅は始まってもない。

こんなのは、まだ序の口だ。

ここからは本当の地獄というものが

待っている。

潜んでいる。

この扉の向こうには空が広がっている、、あなたは本当にこの先に行く勇氣はありますか？」

お？異世界感のある展開じゃないか。

どっちにしろ行くしかないんだ。

こんなの扉の向こうに進む一択しかないだろ。

「ギガガーギギー」

「ようやく閉ざされた扉も開いたようだ。」

ここからが、俺の本当の異世界転生だー！

扉の中を見ると、空にはつながっていない。

暗くもなく、光もない。

どこに行けばいいんだ？

「ギギーボタン」

「うわ！暗い！」

何も見えない。

「本当にここに入るとは。愚か者が。」

「だから入るしかなかったんだ。」

「まあいい。今すぐにお前にここから抜け出させるわけにはいかない。」

「早くいかせろよ。」

「この世界の空をまだ拝んでないんだ。」

「ふっ、いいだろう。」

「では、私の挑戦に勝てたら、お前には私の持つ中で最強の武器をくれてやる。」

「最強？今お前、最強って言ったな？  
一番強いってことだよな？」

「ああ、そうだ。しかし命をかけた勝負だ。やるか？」

「やるに決まってるだろ！」

「では、これより始める。」

ようやく来たー！俺の初クエストー！

## 第四話

### 試練

「それでは試練を開始する。」

気がついたら、周りが見渡せるほど明るくなっていたようだが、ランプや、炎のようなものは見当たらない。

中は祠のようになっていて、いかにも異世界のダンジョンのようだ。

しかし、ゲームでいうオブジェクトみたいな仕掛けは大してなさそうだな。

「ガチャツガチャーーーーー」

「何だあれは？」

そこにはクイズ番組でよく見るような机とまるばつボタンみたいなものが置かれていた。

「試練って、クイズのことか？」

「今からお前には問題を答えてもらう。」

簡単なものも出していくが、全てがそうだとは言えない。」

まじかークイズかーーーーー。

異世界で言う試練ってクイズなのか？

もっとアクションとか謎解きとかそういうのじゃなくて？

まあ、謎は解くけど、なんか絶対違うやつだ。

「一回答えられなかったら、上に刺さっている棒が抜かれる。

2本抜かれたら天井が落ちてくる仕組みだ。」

命懸けか。

でもこういうのって大体1回目じゃわからないから、何回も繰り返して解いていく感じだよな。

だが、さっきまでやったあの地獄をもう何回もやり直すのか？

そもそも復活する保証があるわけではない。

なにしろ死ぬのもそんなに楽なことではない。

一度味わったら忘れられないあの痛み。

うっ、ダメだ・・・

考えるだけでさっきの傷口がズキズキしてくる。

「考えてももう戻ることもできないのだ。

早く席につきたまえ。」

もう時間はないみたいだ。

待て？明るく考えてみれば悪くない話だ。

最強の武器がもらえるんだぞ？

あんな弱い武器じゃなくて、きちんとしたこの世界の武器が。

いいことじゃないか？

それから俺は何も言わずに、席に着いた。

その瞬間、席から縄が出てきて締め付けられ、身動きができなくなっただ。

逃げるなどということみたいだが、元々逃げる気なんてない。

「まず、この世界で魔王に一番近いものと言われている三大悪魔はマンラ、アリディテだが、あと一つの名を答えてもらおう。」

「きた！この問題、俺がやってたゲームと同じ設定みたいだ。もう一人は…」

「スコンベルだ！」

「あっている。では、次の問題だ。」

「よし！来い！」

「この国の王の名前を答えてもらおう。」

「誰だよ！俺がそんなこと知ってると思ってるのか！」

「答えられないようだな。では、」

「ガーーーーーガタガタ」

天井に張り付いたような巨大な棒が、少しずつ抜かれている。

抜かれきった頃には、さっきまで頑丈そうに見えた天井が、急に不安定になってきている。

くそっ間違えてしまった。

こんなことなら先に女神にこの世界の情報を聞いておくべきだったのか？

あんな意味のないヒントだけくれやがって。

次は異世界基礎知識であってくれ。

これで答えれたら超激アツだぞ！

「異世界で言われている、世界三大発明は？」

わかっかんねー！

俺がやってたゲームでそんなんあったか？

発明品なんて何個もあったから、どれが三大発明とか分からねーぞ？

一番それっぽいやつを3つ言っておくか。

意外とアニメだところ言うので当たるもんだからな。

「ウエポン製造機、ヒールポーション、クリアイヤリング！」

「ハズレだ。この世界の話ではない。

異世界でのことを聞いているのだ。」

「くっっそーそーそーそー！」

適当に言ってワンチャン当たるかなって思ったけど当たらなかつた。

まあ、一応この世界にこの名前のアイテムはあるのか。

やはり、そんな簡単に上手くいく世界ではないようだ。

ていうか、まず、

異世界って何だ？ここって異世界じゃないのか？

「ギギーガー……ガタガタガタガダガダ」

「ぐわああー」

俺は落ちてきた天井に押しつぶされ見事にぺちゃんこになったようだ。

「起きて…起きてください」

また生き帰ることができたみたいだ。

「起きてくださいってば」

さっきと同じくだけりか。

このくだけは3回目だ。

「また死んでしまったようですね。」

やはり、さっきの出来事で死んでしまったようだ。

俺はまたあの地獄をやり直さないといけないみたいだな。

「それでは、セーブポイントまで行きますか？」

「え?!」

「なんだ？今、何って言った？」

「だから、セーブポイントまで行かれますか？」

俺の理の外を突いてきた、予想外の返答だった。

「セーブポイントまで行けるのか？」

「はい。もちろんでございます。

あなたは先ほどの扉の中から再スタートできますよ。」

「それなら是非、さっきのところまで戻してください。」

「では、今からあなたをセーブポイントまで戻れるよう祈りを捧げ

…

「ちょっとまって！待ってくれ！」

「え？」

そう。俺はこの女神に聞かなければいけない大切なことがあったのだ。

「この世界の魔王って、いったい誰なんだ？」

「あら？存じ上げませんでしたの？」

「そんなの知らねーよ。」

「今この世界に来たばかりなんだからよお。」

「あら？そうでしたね。」

「それならばお話ししましょう。」

「この世界を牛耳り続ける、あの邪悪な魔王の話を」

「いや、そんな長々と話さなくても大丈夫なんで、手短かにお願いします」

「はい。彼の名前はピーア。」

「最強にして最恐と言われていて、この国の魔王であり、悪魔でもあります」

「なんかラップみたいな韻を踏んで説明してきたぞ？真面目に話しているのか？」

「だが、ようやくこの異世界の解説みたいなのが聞けるな。」

「もとは、それはもう美しい天使でしたが、何かがきっかけで悪魔に堕ちてしまったみたいです」

「墮天しちゃったってことだな？」

「はい。その理由は分かりませんが、今は彼のせいで国中が、い

や、世界中が怯えております。

しかも、誰かが魔王を倒してくれると皆が言い続けるせい、誰も魔王に反抗的な態度をとらないのです。」

「誰も反抗しないってことは、誰も不満が無いってことじゃないのか？」

しかも魔王にやられたりするとかはないんだろ？」

「そうなのですが、そのせいで魔王もやりたい放題なのです。

それに、この世界はもともと皆が天使のことを絶対に信じなければならぬ世界なので、国民は自分たちにあまり変化は感じませんでした。

もうひとつ、国民は魔法が使えるのはもともたなのですが、それが魔王のおかげと言いつつ張っているんです。

そして、それを止めるために呼ばれたのが勇者の存在なのです。」

「俺のことだな！」

てか、めっちゃありきたりな設定だな。

一応普通のよくある異世界みたいだな。

いや、そもそも異世界な時点で普通ではないのか？

あと、魔王のおかげで魔法が使えるようになったってことは、魔王が来る前は魔法が使えなかったのか？

とは言え、国民が魔法が使えるのだから、俺のいた世界では、まづ考えない話だ。

「そう。あなたがその勇者なのです。」

あなたは千年に一度の勇者と言われており、皆が期待して待っています。

ほら。これをご覧ください。

このように、ある村の鍛冶屋は魔王が恐ろしいからと仕事にならず、ある農家は、魔王に天気を操られ、農作物が育たず・・・」

「ああ、もう大丈夫です。

十分にわかりました。

ご説明ありがとうございます。」

「あら？まだ二割ほどしか説明できていませんよ？」

あれで二割なんて。

全て話したらとんでもない情報量になって、かえってややこしくなりそうだ。

「とりあえず、名前はピーアでいいんだな？」

「その通りです。」

魔王っていう割には、結構かわいいなまあしてるな。

ピュアみたいな名前だし、結構純粹だったりして？

てかそんなことより、魔王の名前が聞けたんだ。

十分な収穫だ。

さっきの試練は、あの感じだととりあえず2問正解できれば助かりそうだし、これで安心だな。

「とても良い話をありがとう。

それでは、お祈りお願いします。」

「…汝、心も体も傷あらず。

もう一度この場に戻って来られることを願って…」

「もうここには戻りたくねーよ」

「行ってらっしゃいませ！」

「なんだ？…うわー！ー？！」

気がついたが、さっきの扉に入ったところか。

「本当にここに入るとは。愚か者が。」

やはりさっきと同じセリフだ。

だがこれ以上さっきと同じ展開にはさせない。

俺は話を全て聞いたあと、しっかりと縄で拘束された後、答えを知っているクイズを解くことになった。

「まず、この世界の魔王に一番近いものと言われている三大悪魔はマンラ、アリディテだが、あと一つの名を答えてもらおう。」

さっきと全く同じ問題だ。

それに、一言一句間違えずに同じ言葉を発しているのは、何とも新鮮な気持ちだ。

すまないが、このクイズはこれで全問正解して、次に進ませてもらう。

まず最初に：

「答えはスコンベルだ！」

1回目に答えたときよりも何倍も自信に満ちた声で答えた。

「正解だ。思ったより早く答えたな。

簡単すぎたか？」

どうせこんなこと言っておきながら、本当は頑張って作ったクイズなんだろう？

声に出して言ってやろうか？

おっと。

調子に乗りすぎたみたいだな。

だが次の問題の答えもすでに知っている。

2問目の正解もただかせてもらおう！

「では次だ。」

「よし。はい！」

「この国の皇帝の名前を答えてもらおう。」

「簡単だ！答えは……は？こ、皇帝？」

「皇帝？皇帝って誰だ？」

「分らななかったみたいだな。それでは、」

「ギーガーガーガタガタ」

また、上の棒が抜かれているようだ。

ていうか、なぜだ？

1 問目はまったく同じ質問だっただろ？

折角一回死んで、わざわざ長々しい説明も聞いたって言うのに、今度はさっきと違う問題が出てきたせいで間違えるなんて。

しかも絶対答えられると思ったからあんな調子乗って自信満々で答えてたのに。

次も同じ問題が出ると思ってたからこの世界の魔王のことは聞いたけど、異世界の何とかなのことは聞くの忘れてたな。

この世界が異世界じゃないのか？

でも、死ぬ前と同じ問題が出るとは限らないみたいだし、異世界の問題が出ないかもしれないな。

「では最後だ。異世界での、世界三大発明はは？」

死ぬ前の問題と全く一緒じゃねーかー！

やばい。

さっきみたい違う問題が出てくれればワンチャン答えられたのに、まさか違う問題が出るなんて。

もしかしたらさっき答えなかった2個の発明品が残りの中に入るのかもしれないな。

でも、結局どれが正解かはわからない。

全部試すと何通りになるんだ？

1個目がウエポン製造機だった場合で、2個目がヒールポーションだった場合から、さらに：こんなこと考えてもダメだ。

わからないし、こんなとんでもない回数クイズを繰り返さないといけないのか？

何としてでも、早く答えを考えないと。

そうだ！

なんとかこの場所から抜け出せないか？

いや、辺りを見回してもなんか手がかりみたいなものがないし、縄は丈夫で解けそうにないからな。

どうすれば：

お！縄が出ているところは、金具になっているぞ！

鍵穴みたいなところもあるし、もしかしたら何か針金のようなものでこじ開ければ抜け出せそうだ。

今のポケットには何が入ってるかな？

中を見ると、使い終わって捨てる場所が無かったからか、そのままポケットに入れておいたティッシュ、小さなノートが入っていた。

汚ねーなこのティッシュ、それにこのノートには何が書いてあるんだ？

いや、今はそんなことを考えている暇はない。

とにかく、針金のようなものは：

ズボンやジャージなどのポケットをくまなく探したが、やはり針

金のようなものはどこにも無かった。

てか、今更だが拘束される前は別に鍵を使って捕まったわけじゃ無いからこの鍵の穴はダミーか何かか。

くそっ。どっちにしろ、抜け出すことは不可能みたいだな。

やっぱりもう一回死んで女神にこの異世界のことを聞くしかないのか…

これで異世界に来てから死ぬの何回目だ？

本当に最悪な世界だ。

もしかしたらこの先もこんな世界で、会うあと会う人も、こんな俺に試練を与えてくるのか？

この世界の人は自分がいる世界をおかしいと思わないのか？

俺がいる世界だったら、こんな魔王に好き勝手なんてされたら、みんな黙ってないぞ？

あの女神だって、魔王がいること以外は普通の世界だったみたいなこととも言ってたしな。

この謎の声もそうだし、こいつらからしたら、俺が元々住んでいた魔王なんていない世界の方が、よっぽど異世界なんじゃないのか？俺の世界に魔法はないし、この世界の人が見たら驚いて異世界だ！なんていうんだろうな。

俺の世界が異世界か…

「あ！そういうことか！やっと正解がわかったぞ！」

「ならば、答えてもらおうか。」

そうか、そういうことだったんだ。

よく考えればこんなの、中学校で習ったことじゃないか。

「  
答えの世界三大発明っていうのは、  
……」

## 第七話

### 疑惑

「答えの世界三大発明っていうのは、羅針盤、活版印刷、火薬だ！」

「…正解だ。」

こんなのめっちゃ簡単なことだったんだ。

この世界のから見た異世界っていうのは、俺がもともと住んでいたあの世界のことだったんだ。

そして、俺がいた世界の三大発明っていうのは、羅針盤、活版印刷、火薬のこと、だからこの三つが正解なんだ。

「しかし、よく三つとも答えられたな。」

羅針盤は、この世界でも流通してるし、活版印刷も知っているものは多いが、火薬なんて、国家機密だぞ？

もしかして、お前はどこかからの刺客なんじゃ？」

なんかこの展開はまずい。なんとか誤魔化さねば。

「なんてな。悔しくて、ついこんなことを言ってしまったが、正解は正解なんだ。」

きちんと報酬は渡さねばならんな。

第一お前は見た目からして平凡だ。

そんなたいそうなものではなからう。」

なんかイラついたが、とりあえず疑いが晴れてよかった。

「それなら早く約束のものをくれ！」

「そう慌てるな。ほら、これが私の持っている中での最強の武器だ。受け取れ」

俺が受け取ろうとした矢先に、

「いやまて。その前に、お前のいま手に持っている、汚らしい紙屑は早くしまいたまえ。」

そんなものを持ちながら私の大切な武器を触らないでもらおう」

流石にベツタリしているから、汚いかもな。

しかも鼻を噛んだことを知ると、もっとそう感じられるかもしれないな。

仕方がない。ポケットにしまうか。

気を取り直して、中身は剣か？槍か？もしかしたら、また弓か？そこにはとても立派に見える盾が入っていた。

「最強の武器シールドだ」

いや、この展開だと攻撃系だろ！

なんで盾なんだ。

攻撃ができないっていうのに、こんなじゃ敵を倒せねえよ。

「どうした？不満か？このシールドの強さを知らないのか。ならば体験してもらおう。」

このシールドの防御力を！」

「ガガーギガダガダ」

あれは？さっき戦った敵じゃ無いか！

しかも2匹もいる。

1匹倒すだけであんなにも苦労したのに。

これはこの盾を手にした俺へのチュートリアルみたいな感じか。

「グルルガールー…がー…！」

襲ってきた！

でも、この盾で…

「カキーーーン」

「ガララグルルー！」

すごい！相手はとんでもない勢いで俺を襲ってきたっていうのに、俺にはびくともしない。

これが最強の盾っていうものなのか。

あの弓とは性能の良さがまるっきり違うぜ。

「どうだ？私の最強の盾の効果は！」

「おう！最高だぜ。これがあればどんな敵でも倒せそうだぜ。」

「ガルルーガー！」

今度はもっと本気で襲ってくるみたいだ。

臨むところだ。何回だって、この盾で跳ね返してやるぜ。

「カコーーン！ガッ…」

「まずい！やりすぎたか？」

「?!」

「ガタガタガタガタ…」

何だ？さっきまでびくともしないかったのに、今度は盾が吹っ飛んでしまったぞ？

ていうか、やりすぎたって何だ？

この敵って、この声のやつが操ってるのか？

「やりすぎたって何だ？

今まで本気じゃなかったのか？」

「すまない。隠していたが、今お前が戦っているのは、私の手下で、私が指示を出してそのまま動いている。

私が考えたことを、そのままやってくれるんだ。」

「じゃあ、やりすぎたってことは、お前、この盾が弱いことを知ってて？」

「いや、それは違う。」

この盾は私の持っている中では最強の武器だ。」

「じゃあ、なぜあんな敵に攻撃されただけで吹っ飛んだんだ？」

「それはだな。この武器は私の持っている中では最強だが、この世界では大して強いわけでは無いのだよ。」

「くっそー！ー！何だよそれ。」

わざわざあんなにも苦労したっていうのに！」

「すまない。苦労したと言っても、問題に答えただけじゃ無いか。」

そうか。こいつからしたら俺は死んでいないからそれだけの事しかしてないのか。」

「だからってこれは無いぜ？」

「本当にすまない。このシールドは、ぜひ貰っていってくれ。」

それに、今すぐこの場所から出してやる。」

「わかった。それなら」

「ガールーガー！」

「うわっ！」

俺はすっかり尻餅をついてしまい、ポケットの中のものが出てしまった。

「痛ってー！お前の部下、まだ襲ってくるぞ！どうにかしろよ  
まったく」

はー。しょうがない。

落ちたもの拾って早くずらかるか。

お！これはさっきさっきのノートじゃないか？

どれどれ？何のノートだったっけなー？

なんかメモがいっぱい書いてあるな。

俺はすっかり安心して、周りを気にせずノートの中をペラペラ見  
ていた。

これは何のノートかな？そんなことを考えていたら：

「お前が持ってものは何だ？！」

この謎の声は、今まで聞いた中で一番な大きさと勢いで俺に尋ね  
ていた。

心臓が飛び抜けそんなほどらびっくりしてしまうような恐ろしい  
声だった。

「え？これは、俺のノートで…」

「今すぐこいつを捕まえろー」

「ギーガガ」

何だ？

「ガラルルルラーラーラー！」

何だ？

「ガラルルラーラーラー！」

気がつくど、さっきまで二体だったはずの敵が、ゾロゾロ増えてきて、数えきれないほどになっていた。

「何をするんだ？俺を外に出してくれる約束じゃなかったのか？」

「黙れ！お前の考えていることは全てわかっている！いったいお前は何をするつもりだ！」

考えていることがわかるなら答えなくてもいいだろ。

こいつめっちゃバカだな。

そんなことを考えている間にも、敵はどんどん増えていった。

結構やばい状況かもしれない。

あっと会う間に、周りを囲まれてしまった。

「お前はもう逃げられない。もし命が惜しいなら、そのノートを渡してもらおう。」

「このノートがなんだって言うんだ？いいから早く外に出してくれ！」

急にどうしたんだ！

今にも周りの敵が襲ってきそうだ！

あれには何が書いてあったっけ！

くそっ！見たいのに少しでも目を離したら襲ってきそうな気がする。

でも、この感じだと俺のメモ書きが何かこの国の重要なことについてかかれているとか、何か知ってはいけない秘密でも書いてあるとこいつには勘違いされてるみたいだな。

ただのメモ書きなのに。

これを置いて逃げるしかないか。

だがいいのか？これにそんな大切なことが書いてあるなら、自分で持っておくべきだし、こいつも敵なら、あまり渡さないほうがいいだろう。

第一、渡したところで俺への、怪しみは増すかもしれない。

そうしたら、逆に逃してくれないんじゃないか？

だとしたら、自分で逃げるしかないな。

しかし、周りを見渡しても、入った場所はしっかり閉まっっていて、出ることができないし、他に扉がない。

あるとしても、敵が出てくる場所だけだ。

「何をぐずぐずしている！早く渡せ！さもなければ、おまえは…」

まずい。こうなったら、少しでも敵を減らすために、敵がスポーンしている根源を潰しに行くしかないな。

だが、使えるのはこの盾だけか。

突っ込んだらどうにかなるか？

「ガールルルーガールール…ガァー！」

「カーーン」

また盾が弾かれてしまった。

この盾、いくらなんでも弱すぎないか！

「足掻こうとしても無駄だ！もう諦めるのだ！」

あと使えるのは、この弓ぐらいか？

しかし使ったところで、なんも強くないし、第一、一体ずつ打ってたって、間に合わない。

こうなったら、もう：

「ぐおーーーーー！」

おれは、弓を振り回しながら、敵が出てくる部屋まで一直線に突っ込んだ。

さっきのように、倒していたらキリがない。

今はチートアイテムもないから逃げるしかないんだ。

「急にどうしたのだ？だが、出口はどこにもない。

ノートを渡したら楽になるんだ。

大人しく渡してくれ！」

「ガルルルーガールーガ！」

うるさい！おれはそんなことをしなくてもここから出れると信じ

てるんだよ。

「どりゃー！ー！ー！」

なんとか、敵が湧いてきている場所まで辿り着いた。

おっ！あそこの機械から敵が湧いてるみたいだ。

あとはこれを壊せば、一旦これ以上は増えない。

向こうにももう一つ部屋はあるみたいだが、いまは、もっと大事なことがある。

「おらっ！」

とりあえず、力づくでスポナーらしきものは壊せた。

さっき沸いていた向こうの部屋に行った敵が、たくさんこちらに集まって来ないうちに、サッサと逃げるぞ！

もう一つの部屋の中には、これ以上道は続いていないが、大きな扉が一つあった。

あそこから逃げるしかない。

外からは光が差し込んでいた。

そこから逃げれる思ったが、手が届きそうにない高さだった。

俺は扉の方まで走っていき、開けようとしたが：

「ぐっ。開かないか」

やはり扉は全く開きそうになかった。

持っているものを見ても、何か扉を開けるのに使えそうなものはない。

「ガルルルーガー！」

俺が扉を開けるのに夢中になっていると、後ろから襲ってきた敵に襲われてしまった。

「いってー！こっちだって攻撃できるんだぞ！どりゃ！」

「ガルルルーガー！ルール！」

さっき暴れた時の勢いあってか、前よりもすんなり倒すことができた。

もしかしたら、こいつを倒せば扉が開いたり、なんて期待をしていたが扉にはやはり変化はなかった。

「はーはーっはー」

しかし、あんなに動き回ったからか、息はすっかりきれている。

「今敵に近づかれたら、流石に戦えないか？」

やばい！めっちゃフラグみたいなのを言っちゃった。

「ガルルルーガー」

息を切らして下を向いていたら、気付かぬうちに大勢の敵に囲まれていた。

「ガールルルーガーガー……」

襲ってくる！だが、もうこれ以上体は動かない。

「パチッ！」

襲われそうになって瞬間、指パッチンのような音が聞こえ、その瞬間、さっきまでの勢いはどこにいったのか、大勢の敵が一瞬にして、ばたりと倒れ始めた。

「何が起こっているんだ？」

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
[http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel\\_id~31467](http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~31467)

---

転生したらチートアイテムが弱すぎて詰んでしまいました  
2026年04月10日 20時56分発行